栽培品でしか観察できなくなった希少種

戸隠森林植物園のトガクシソウ (長野県長野市戸隠)

植物図鑑を何冊か紐解くと、「トガクシソウ別名トガクシショウマ」と、「トガクシショウマ別名トガクシソウ」の二つの記述がある事に気が付く。実は、この植物を巡って、かつて熾烈な戦いがあった。その結果、二つの名前が記載されると言う、珍しい現象が起ったのである。巷ではこの話を「破門草事件」と呼び、語り継がれる事となった。

ここで登場するのは、二つの名前を付けた両名。一人は、伊藤篤太郎である。本草学者であった、東京大学教授・伊藤圭介の孫であり、東京大学植物学教室に出入りを許されていた、在野の植物学者であった。もう一人は、その東京大学植物学教室の初代教授、矢田部良吉である。

まず、話は伊藤篤太郎の父、伊藤謙が、1875年(明治8)に、戸隠山山中で、未知の植物を採集した事に端を発する。伊藤謙は、伊藤圭介の三男で、父親の跡継ぎとして期待された人物であった。明治初年は、国策として殖産興業が急務で、地域の産物(動植物や鉱物)を解明する必要に迫られていた。明治8年に、長野県で本格的な山岳調査が行われる事となり、当時24歳であった謙も、この調査に参加したのである。

調査の終盤、8月9日、戸隠山系の高妻山山頂を目指していた一行は、林の中で白い実を結んだ未知の植物に遭遇する。謙はこの株を採集、圭介の勤め先であった小石川植物園に移植したのである。これは翌年に開花し、研究が進められるはずであったが、謙は胸を患い、4年後に夭折してしまった。28歳の若さであった。

謙の研究を引き継いだのが、伊藤篤太郎である。当時若干13歳であったが、植物学の英才教育を受け、18歳で、ロシアの植物学者・マキシモヴィッチに英文の手紙や、植物標本を送っている。この標本の中に、例の未知の植物標本が入っていた。

ところが、この未知の植物を研究していたもう一人の学者がいた。それが、矢田部良吉である。未知の植物の情報は、小石川植物園で得たものと思われる。彼は1884年(明治17)に助手達と高妻山に登り、未知の植物を採集、小石川植物園に移植した。2年後に開花し、彼も同じように翌年マキシモヴィッチに標本を送り、鑑定を依頼したのである。ところが、マキシモヴィッチは、メギ科の新属を考え始めていたので、矢田部良吉に、もう少し資料を送ってほしいと連絡してきたのである。矢田部はこの植物にトガクシショウマの和名を用意していたのである。

イギリスのケンブリッジ大学に私費で留学していた22歳の伊藤篤太郎は、帰国後すぐにこの情報を知り、ロシアのコマロフ植物研究所に保管されている、伊藤謙採集のタイプ標本を基に論文を執筆し、イギリスの植物学雑誌に投稿したのである。1888年(明治21)10月号の論文の中で、新属を提唱し、和名トガクシソウを発表したのである。

これを知った矢田部は激怒し、篤太郎の東大出入禁止処分にしたのである。これは、事実上日本の植物界からの追放を意味し、トガクシソウは「破門草」とも呼ばれ、巷ではこれを破門草事件と呼んだと言う。

その後、矢田部は日本の研究雑誌にトガクシショウマとして発表したが、学名は篤太郎の学名に従うしかなかった。その後も矢田部の弟子達によってトガクシショウマの名前が流布され、二つの和名が存在して今日に至っているのである。

トガクシソウの原産地である戸隠山系では絶滅状態。他の生育地は、尾瀬等が知られているが、場所は秘匿されていて、自然の状態で見るのは難しい。栽培されているのは、戸隠森林植物園の前庭、軽井沢植物園である。

トガクシソウ
戸隠森林植物園前庭にて。草丈は20㌢程で、これは咲始め。この後、葉が展開していくと共に草丈が伸び、花柄は長くなり、垂れるように咲く。果実になる頃には、草丈は50㌢程にまで成長する。